



ラオス国立大学の学生とディスカッションする参加青年たち(ラオス)

国際社会青年育成事業

International Youth Development Exchange Program (INDEX)

内閣府の青年国際交流事業において最も歴史のある事業で、1959年(昭和34年)、1993年(平成5年)の当時の皇太子殿下の御成婚を記念する事業として発展してきました(1959年に「青年海外派遣事業」を開始、1994年に「国際青年育成交流事業」に発展)。

これまでの「国際青年育成交流事業」はバルト三国や中南米及びアジア諸国などに日本青年を派遣し、訪問国では現地青年との文化・教育・環境に関するディスカッション、企業等施設訪問及びホームステイを行ってきました。そして帰国後は、日本に招へいされた外国青年と一堂に会して国際青年交流会議に参加し、外国青年とのディスカッションを通じてプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の向上に努めてきました。

そして、2019年5月のお代替わりを契機に、「国際青年育成交流事業」は、骨格を残しつつ、より現代のグローバル社会に沿った国際的視野を持つ青年育成を行う事業として、「国際社会青年育成事業」に生まれ変わります。新事業では共通の課題を抱える2か国ずつに青年を派遣します。

【事業概要(派遣プログラム)】※「国際青年育成交流事業」時のものとなりますが、新事業でもプログラム構成の骨格は維持します。

活動内容: 表敬訪問、現地青年とのディスカッション、日本文化紹介、国際協力活動の体験、ホームステイ、課題別視察等

訪問国: オーストリア、ラオス、ラトビア ※2018年度の例

参加青年数: 12名程度×3か国 ※2018年度の例。2019年度からは、12名程度×3地域(2か国ずつ)とする予定

派遣期間: 9月～10月頃(18日間)

※派遣プログラム後の国際青年交流会議にて、招へい国青年と交流・討論

【参考】招へいプログラム

招へい国: オーストリア、チリ、ドミニカ共和国、ラオス、ラトビア、ベトナム ※2018年度の例

招へい期間: 10月頃(16日間)

招へい青年数: 6か国計50名程度



ライモンツ・ヴェーヨニス ラトビア大統領を表敬訪問(ラトビア)



ヤングカリタス(キリスト教系青少年支援団体)のメンバーとディスカッション(オーストリア)

■参加青年の感想 ※「国際青年育成交流事業」時のものとなります。



宮澤 俊太郎
(2017年度参加 ミャンマー派遣)

ミャンマーのヤンゴン川を渡る大きな船の上では、まだ7歳ほどの少年が強烈な匂いを放つ小魚を袋いっぱい詰め、船を回って販売していた。靴を履いても歩くのがはばかれるほど船上の床は汚かったが、彼の足元を見れば裸足だった。その日は日曜日だったので、ホームビジット先の娘さんを介して週末だけ働いているのかと聞いてみたが、彼は毎日働いていると答えた。学校に行けず、家庭のために毎日船に乗り込み、働いている。私は胸が張り裂けるほど複雑な気持ちになったが、対照的に彼の目は、ここから這い上がってみせるというミャンマー人のハングリーさを如実に表した真っ直ぐな目をしていて。

彼と同じ年代ほどの子供たちに、今度は学校で出会う機会があった。僧院学校と呼ばれる、日本でいう公立小学校を訪問した。1クラス40名の声とは思えないほどの大きな声が教室に響き渡り、先生の問いかけに全員で答えていた。もちろん冷房などないので、我々は汗だくになりながら、小学2年生くらいの生徒たちに折り紙を教え、交流した。タナカ(ミャンマーの伝統的な日焼け止め効果のある顔面装飾品)を塗った顔をクシャッとさせて笑顔を活かす、うまく折れたことをアピールしてくる子供たちは、言葉こそ通じないが我々の心を豊かにするパワーがあった。

この二つのような出合いを日本で経験することは難しいだろう。また、新しいものに触れたときに自分がどう感じるかは、その時にどんな人と一緒にいるかで変わってくると思う。だからなおさら、私はこのプログラムに参加できて良かったと、心から思う。自分にとって最も大切な出合いは、一緒にミャンマーに行ったメンバーとの出合いだ。団員皆を母親のように見守ってくださり、誰よりも元気な団長。「能ある鷹は爪を隠す」とはまさにこの人のことだと思えるほど、本性を見せない優秀な副団長。そして、北は北海道から南は鹿児島まで、愛すべき兄弟姉妹とも言える団員たち。このプログラムに参加すれば、考え得る最上の出合いと、彼らと共に経験する有意義な時間を過ごすことができるだろう。人との出合いは、染み付いた考え方を取っ払い、自らの行動を変える力がある。そして自分もこの経験をいかし、また次なる出合いへとつなげていきたい。

この二つのような出合いを日本で経験することは難しいだろう。また、新しいものに触れたときに自分がどう感じるかは、その時にどんな人と一緒にいるかで変わってくると思う。だからなおさら、私はこのプログラムに参加できて良かったと、心から思う。自分にとって最も大切な出合いは、一緒にミャンマーに行ったメンバーとの出合いだ。団員皆を母親のように見守ってくださり、誰よりも元気な団長。「能ある鷹は爪を隠す」とはまさにこの人のことだと思えるほど、本性を見せない優秀な副団長。そして、北は北海道から南は鹿児島まで、愛すべき兄弟姉妹とも言える団員たち。このプログラムに参加すれば、考え得る最上の出合いと、彼らと共に経験する有意義な時間を過ごすことができるだろう。人との出合いは、染み付いた考え方を取っ払い、自らの行動を変える力がある。そして自分もこの経験をいかし、また次なる出合いへとつなげていきたい。



ウィーンの全日制小学校にて折り紙など日本文化を紹介(オーストリア)



スイツ・シエヴァスとの懇談にて民族衣装を試着(ラトビア)



汪鴻雁中華全国青年連合会副主席から全青連、中国共産党大会について説明を受ける参加青年たち

日本・中国青年親善交流事業

Japan China Youth Exchange Program

「日本・中国青年親善交流事業」は、1978年の日中平和友好条約の締結を記念し、1979年から開始された事業で、日本・中国両政府が共同で実施しています。

日本と中国の青年が相互に相手国を訪問し、文化紹介やホームステイを通じた交流とともに、ビジネス環境・就職・ボランティアの状況などについて、両国の共通点や相違点などを掘り下げて考える機会ともなる大学生との意見交換、グローバルに飛躍をとげる中国の先進企業を訪問、起業をめぐるビジネス制度等に関連する施設の訪問等を行います。

【事業概要（派遣プログラム）】

- 活動内容： 表敬訪問、現地青年等とのディスカッション、各種施設訪問、文化紹介、ホームステイ等
- 訪問先： 北京、西安、宝鶏、成都 ※2018年度の例
- 参加青年数： 25名程度*
- 派遣期間： 10月～11月頃（12日間）
- *団長、副団長、渉外を含む派遣青年数は30名程度
- ※招へいプログラムや派遣プログラムにおける夕食交流会で中国招へい青年と交流・ディスカッション

【参考】招へいプログラム

- 招へい期間： 8月～9月（12日間）
- 招へい青年数： 30名程度（団長・副団長を含む）



北京大学学生との活発な意見交換



惠水県好花紅村にて布依(ブイ)族による歓迎

■参加青年の感想



飯塚 真央（2017年度参加）

私たち中国派遣団は北京市、貴州省、広東省の3か所を訪れた。その一つである貴州省には**17の少数民族**が住んでおり、惠水県と雷山県にて実際にブイ族、ミャオ族の文化を知ることができた。また視察を通して、貴州の経済発展も目にした。そして私自身最も印象に残っているのは、貴州省貴陽市で行われたホームステイであった。

私は5歳の子を持つ夫妻の3人家族のもとで、**一泊二日のホームステイ**を行った。私が来ることを聞いたホストファザーの友人らも駆けつけてくれた。私自身、一人でホームステイをしたため、言葉の壁が不安であった。しかし、私が伝えようとしていることを彼らが懸命に理解しようとしてくれたおかげで、そのような不安はすぐになくなった。夕食になると、ホストファミリーは私に貴州料理を作ってくれて、そのおもてなしには大変驚いた。中国では、食後に散歩に出かける人が多いそうだ。その

のため、私もホストファミリーとその友人らと共に中心街まで散歩をした。そこは多くの高層マンションが立ち並び、運動をする人や踊っている人が集まっていて、とても賑わっていた。町を散策することで、中国人の生活を目にすることができ、日本人との違いを知る大変良い機会となった。

二日目には、貴州大学に連れて行ってもらった。キャンパス内は車で移動するほど広く、学生数も私の大学の3倍以上であったため、その規模には驚かされた。**ホストファザーは貴州省でボランティア活動**をしている方であり、大学内にある活動拠点を訪問した。**彼のボランティアに対する熱い思い、貴州を愛する心は忘れられない**ものであった。彼は貴州省に長く住んでいるため、貴州について非常に詳しく、文化など様々な話題を私に教えてくれた。私自身も、日本の文化について紹介することで、互いに理解を深め合うことができた。「日本に行ってみよう」と言われた時は本当に嬉しかった。

二日間のホームステイはあっという間に終わってしまったが、ホストファミリーは私に「さようなら」という言葉ではなく、「また会おう」と言ってくれた。国境を越えてのこの出会いは、私にとって宝となった。住んでいる国が違っていても、今後も友情を築いていきたい。



ホストファミリーと名所・黄金大道で紅葉で綺麗な景色を鑑賞



騰訊(テンセント)株式会社を視察



Nソウルタワーにて記念撮影する参加青年たち

日本・韓国青年親善交流事業 Japan Korea Youth Exchange Program

「日本・韓国青年親善交流事業」は、1984年の日韓両国首脳会議における共同声明の趣旨及び1985年の日韓国交正常化20周年を踏まえ、両国政府の共同事業として1987年から友好の象徴として実施している事業です。

文化紹介やホームステイを通じた交流、地球環境、産業、文化、教育、社会福祉等の各種施設、先進企業の訪問や韓国青年とのディスカッション等を行います。これらを通じて、日韓関係の将来に向けたありようについて踏み込んで考え、どのような領域で青年たちが貢献できるのかを考えてゆく機会ともなります。また、日本に招へいた韓国青年と日本青年との「日韓青年親善交流のつどい」（合宿型ディスカッション・文化交流プログラム）等を行っています。

【事業概要（派遣プログラム）】

活動内容： 表敬訪問、現地青年との合宿型ディスカッション・文化交流プログラム（「日韓青少年交流会」）、各種施設訪問、文化紹介、ホームステイ等

訪問地： ソウル、江陵、平昌、原州、漣川、平澤、水原 ※2018年度の例

参加青年数： 25名程度*

派遣期間： 9月～10月頃（15日間）

*団長、副団長、渉外を含む派遣青年数は30名程度

*日本での「日韓青年親善交流のつどい」や韓国での「日韓青少年交流会」にて、韓国招へい青年等と交流・討論

【参考】招へいプログラム

招へい期間： 7月～8月頃（15日間）

招へい青年数： 30名程度（団長・副団長を含む）



ソウルにて韓服体験



韓半島統一未来センターを訪問

■参加青年の感想



木村 朝香（2017年度参加）
（写真中央）

「하나 (ハナ) になろう!～咲かせ☆日韓の笑顔～」。「日本青年も韓国青年もハナ（日本語で『一つ』）になって、大輪の笑顔の花を咲かせたい。」こんな思いで掲げた**私たち韓国派遣団のスローガン**をまさに実感したのが、韓国青年との交流会である。

私たち派遣団は、**2泊3日**で約**25名の韓国青年と交流会**を行った。派遣期間中初めての同世代の韓国青年との本格的な交流に、膨らむ期待と同時に少し緊張した気持ちを抱いた私たちを、韓国青年は温かな拍手と大きな笑顔で迎えてくれた。

交流会初日のレクリエーションでは、日韓混合の小チームに分かれ、いくつかのミニゲームを行った。会ったばかりではあったが皆すぐに打ち解けていった。そこに、日本・韓国といった国の区別は存在せず、チームの枠も超えた応援の声援が飛び交い、皆の笑顔が弾けた。

二日目には、**多文化共生を大テーマにディスカッション**を行った。いずれの班も活発に意見を交換し合い、両国における様々な問題を巡る状況や、考え方の相違点を学んだ。より相手のことを理解すると同時に、自分たちについても改めて知ることができた、密度の濃い時間となった。ディスカッション後は、各班で話し合った内容を短時間の映像にまとめた。皆で創意工夫を凝らし、一つになって映像を完成させた時には、両国の青年とも大きな達成感と喜びを味わった。その他にも、夜の文化交流会や最終日の共同活動など、韓国青年と共に楽しみ、語り合い、貴重な時間を過ごし、交流会では終始笑顔が絶えなかった。

2泊3日という短い時間の中ではあったが、韓国青年の優しさやフレンドリーさ、両国青年の仲良くなりたいたいという気持ちから、交流会を通し、団員一人一人が韓国青年との友情を築いていくことができた。閉会式の際には皆が別れを惜しみ、抱擁し合った。バスに乗ってからも、お互いが見えなくなるまで手を振り続けた。中には、後に私たちの宿泊するホテルのロビーまで遠くから足を運んでくれる韓国青年もあり、この交流会で築いた日韓両国青年の絆の強さを実感した。

私自身も、韓国青年と、他愛もない楽しい話からお互いの悩みの話までできる、とても深い関係を築くことができた。派遣が終了した今でも、連絡を取り合っている。本事業に参加したことで、共に韓国に渡った日本青年の仲間、そして多くの韓国青年と出会い、強い絆を結べたことに、喜びと感謝でいっぱいである。

今回の派遣を通し하나 (ハナ) になった私たちは、これからもお互いをずっと大切に続け、生涯にわたる、更に強い友情を築いていきたい。



日韓青少年交流会の討論会



国立平昌青少年修練院にて体験活動



連邦政府が実施する多世代ハウスプログラムを視察する参加青年たち(ドイツ、高齢者分野)

地域課題対応人材育成事業 「地域コアリーダープログラム」 Community Core Leaders Development Program

多様な個人が能力を発揮しつつ、自立して共に社会に参加し支え合う「共生社会」を地域において築いていくためには、住民や非営利団体、行政機関等による取組の充実が必要です。

各地域で高齢者、障害者、青少年関連の課題解決に向けた取組に携わる日本青年を、3分野において特色のある事例を有する3か国に派遣する、専門職・組織マネジメント経験者向けの事業です。各国で同じ分野で働く同世代の若者との交流や政府機関・関連団体及び施設の訪問や意見交換等を通じて、国内外に広がる人的ネットワークを形成し、社会課題解決能力を高めます。

訪問国では、同様の課題解決に取り組む専門家との交流を促し、組織の運営、関係機関との連携、人的ネットワーク形成に必要な実務的能力の向上を目指します。また帰国後は、日本に招へいされた外国青年と一堂に会してNPOマネジメントフォーラムに参加し、外国青年とのディスカッションを通じて、日本の地域社会における課題解決に向けて中心的な担い手となる青年リーダー(コアリーダー)の育成を目指します。

【事業概要(派遣プログラム)】

活動内容： 3回にわたる国内研修、訪問国における各専門分野の社会活動の現場視察、関連施設の訪問、表敬訪問、意見交換、ホームステイ等

テーマ： 高齢者分野「地域における高齢者支援に必要な連携」
障害者分野「地域における障害者の社会参画の更なる拡大」
青少年分野「子供・若者の育成支援に関わる人材の養成」 ※2018年度の例

訪問国： ドイツ(高齢者分野)、フィンランド(障害者分野)、ニュージーランド(青少年分野) ※2018年度の例

参加青年数： 8名程度×3か国

派遣期間： 11月頃(10日間)

※派遣プログラム後に東京で開催する「NPOマネジメントフォーラム」にて、招へい青年と交流・討論

【参考】招へいプログラム

招へい期間： 11月～12月頃(15日間)

招へい青年数： 8名程度×3か国



在フィンランド日本国大使館山本条太特命全権大使を表敬訪問(フィンランド、障害者分野)



青少年育成で地元との連携に特色のあるハットバリー高校を訪問(ニュージーランド、青少年分野)

■参加者の感想

「ユースワーカー」という言葉をニュージーランド現地で初めて知りました。言葉のとおり若者に関わる仕事に従事する人材のことを指しますが、日本ではあまり馴染みのない呼称かと思います。若者の自立を支援する専門職と定義する機関もあり、我が国でも社会的ニーズがあるように感じています。ニュージーランドでも2011年頃から「ユースワーカー」という職業の認知が拡がり始め、現在では**非営利団体や学校組織にユースワーカーというポストが存在**しています。実際に訪問したウェルテック大学では、「ユースワーカー」になるための学科があり、学生は青少年育成プログラムを学んでいます。

私自身、教師として学級運営を担ったときや取締役として会社経営に携わった際に意識していたことは、実はこの「ユースワーカー」的マインドそのものだったのだと派遣プログラムを通じて気付くことができました。親だけでも教師だけでなく、地域全体の大人が若者を支援することが大切です。しかしながら、日本では社会全般において若者育成のための**当事者意識(オーナーシップ)**が欠如しており、責任の所在を明確にするためなのか「これは学校がやることで、これは保護者がやること」というように縦割り物事を捉える傾向があるように思えます。

ニュージーランドでの驚きの一つは青少年に関わる人々が口を揃えて「私はユースワーカーだ!」と言っていることです。政府機関のスタッフ、スポーツ団体のコーチ、学校の先生、医師、看護師などそれぞれの専門家が「**ユースワーカーである**」という**オーナーシップを持ち、各団体・機関と連携していることに感動**を覚えました。戦後、日本では青少年育成は「教えること(teach)」が最優先であったのかもしれませんが、これからは青少年を「支えること(support)」が重要なかもしれません。**地域の大人が「サポーター(supporter)」たる伴走者となることが重要**だと実感しています。

私は帰国後、自己紹介する際に「私はユースワーカーです」とあえて言うようにしています。今回の派遣プログラムに参加した仲間たちは同じ「ユースワーカー」という意識でこれからも情報交換・交流を続けていけるものと信じております。それは、志同じくかけがえのない時間を共に過ごせたからです。私たちは、「2021年日本ユースワーカー元年」を合言葉に既に動き始めました。将来の「スーパー」コアリーダーである仲間たちと青少年育成のムーブメントを起こしてゆく決意です。



高島 靖明
(2018年度参加
ニュージーランド、青少年分野)



ドルトムント市高齢福祉課にて、日本の高齢者施策について発表(ドイツ、高齢者分野)



障害者を対象としたサービス付き住居にて利用者の方々と交流(フィンランド、障害者分野)